

# 言語発達遅滞児の臨床

## —しんごちゃんとともに—

佐　　々　　加　代　子

### はじめに

子どもたちと共に動き、子どもたちに学びながら臨床実践活動をすすめてきて8年が経過した。出会った子どもたちは200名近くに及んでいる。その間に、人間関係を重視した見方で臨床事例報告をした子どもたち<sup>(6)</sup>、その後 Tinbergen<sup>(17)</sup> に学び、田口の臨床仮説を基盤とした言語臨床実践活動の報告をした子どもたち<sup>(16)</sup>、その後もなかなか思わしい変化をしていかなかった<sup>(8)</sup>という<sup>(9)(10)</sup>ことで報告をした子どもたちがいる。

それらの子どもたちとの出会いから、臨床実践とは、自分自身の“見方”を除いたところでその変化過程を述べるできないということと、子どもと子どもをとりまくまわりの人たちの変化過程が臨床実践そのものである、ということ<sup>(9)(12)</sup>を学んだ。

しんごちゃんは、いわば“無理なく”育ってきた子どもである。他の子どもたちに学んだ見方が、しんごちゃんの臨床に影響を与えたのであろうか。

ここでは5年半にわたる、しんごちゃんについての報告をする。

### しんごちゃんとの臨床実践活動

しんごちゃんの臨床実践活動は5年半にわたっている。5年半前の記録からふり返ってみると、その時々「何故ここでこんなことを言っているのか」と思える箇所がある。当時の自分の育ちがそのまま現われている、と言えよう。それを

この報告は、昭和54年度白梅学園短期大学研究助成金の一部によるものである。ここに感謝の意を表します。

今、その当時のまま記述していくことには痛みを伴う。しかし臨床過程の流れの中で他の子どもたちに学んだことや、しんごちゃん自身に気づかせてもらったその“時”を大切にする意味でも、そのまま記述することにした。それが、私というひとりの人間と子どもとの出会いによって起こったできごとであるからである。反省はきっかけのあった時に述べることにしたい。

### 1. 出会うまでの経過

昭和49年3月、NHKテレビ「幼児期とことばの遅れ」の放送を見た母親がNHKに相談のハガキを出した。放送局から当日番組に出演していたお茶の水女子大学家政学部児童学科の田口教授の言語障害研究室を紹介された。言語障害研究室に相談の予約申込みをし、予約の順番が来るまで研究室から送付された母親への手紙<sup>(15)</sup>というパンフレットを読んで子どもとのつきあい方を学んだという。

### 2. 出会い 昭和49年6月12日

#### 1) しんごちゃんと家族

しんごちゃんは、昭和46年4月8日生れ(3歳2か月)の男児。家族は新聞社の印刷関係の仕事をしている父と母、幼稚園年長児の兄との4人。

#### 2) 親の訴え

①ことばの発達が遅れている、ことばがほとんど言えない

②親の言うことに対する反応がない

③知恵が遅れているのではないか。もし知恵が遅れているのならこの子どもの将来はどうなるのか。これから先どう育っていくのか。親としては何をすればいいのか。

などの悩みを訴えていた。

## 3) 相談歴

2歳6か月の時「ことばが出ない」という問題で区立教育相談所に行った。「遅滞」と言われた。オッパイを吸っているのは年齢にふさわしくないものでやめさせること、男の子だから何でも一人でさせること、オムツをとること、食事も一人で食べられるようにすること、ことばは一つ一つ試してみることを心がけるように言われた。

2歳7か月のとき「ことばが出ない」という問題で病院に相談に行った。心理の先生から「原因はわからないので様子をみた方がいいですが遅滞です」と言われた。父親は、心理の先生のいう遅滞とは何のことなのかが気になり始めた。父親の知りあいの特殊学級に勤める友人に聞いてみたところ「遅滞ということばは精神薄弱児ということが含まれているのではないか」と言った。父親はますます心配になったという。

2歳11か月のとき、NHK、TV番組に出ていたもうひとりの先生の病院をたずね、3歳のときにみてもらった。知能テストの結果、1歳6か月と言われた。父親は「現在遅れていても集団に入ることによってふつうになるかもしれないということを聞いたが、その可能性はあるだろうか。」とたずねたところ「何とも申し上げられない。心の準備はしておいて下さい」と言われたという。

父親は、その先生のことばを聞いて、りっぱな先生がそう言ったということは、この子はもうだめなのではないか。将来ひとり立ちができないのかもしれない。お先まっ暗だと思ったという。

ちょうどこの時期に、お茶の水女子大学から「母親への手紙<sup>(15)</sup>」というパンフレットが届いた。父親は暗記するくらいに読んだという。母親は自分の子どもとこんなによく似た症状の子どもが世の中にいるのかと思ったという。予約の順番がくるまでとりあえず「子どもを喜ばせること」だと思ってやってみた。その間に母親の目から変わったと思えたことは、①笑うことがふえた、②母親の顔をよく見るようになった、③高い高いやお馬さんなどを喜ぶようになった、④兄のあとをくっついていくようになったということであった。

## 4) 生育歴上の特徴

乳児期にはよく眠り、おとなしくて手のかから

ない子どもであった。抱きぐせ、添い寝の習慣がつかず、指しゃぶりもしなかった。人見知りもなく“芸”をして人を喜ばせるということもなかった。

3歳すぎに、パンフレットを読んで母親が子どもの近くに居てあやし行動などをたくさんするようになってから、笑うことがふえたり、母親と目が合うようになった。

身体発達は順調でひとり歩行は1歳。ひきつけを起こしたことがない。

オムツは2歳6か月までしていたがとるようにしたところ、トラブルもなくとれた。

## 5) ことばの発達

2歳すぎるまでの間、ほとんど声を出していなかったという。2歳6か月頃になってから、わけのわからない声を出すようになった。何を言っているのかよくわからなかったという。声を出すのは、ふざけているときや、きげんがよいように思われるとき、電車に乗った時などにウーとかオーとか言っている。言えることばは、りんご、バナナ、ミカン、お茶、でんき、カレー、かぎ、ジージ(字)、電車、シャ(自動車)、シャ(消防車)、ギューウー(牛乳)、ガム、ハム、ボーウ(ボール)、アメ、エッケン(石けん)、イカン(ミカン)、オウチ、イヤ、バイバイ、ごっちょちゃん(ごちそうさま)、アッチッチ(ガス台のところに言って言う)、カエロウで、いずれも母親に聞きとれたことばである。以前に言っていて言わなくなったのが、ホン(本)、テレビ、レコード、クック(靴)であるという。

母親は、今ことばがふえつつある時なのではないかと喜んで言うが、父親は、前とほとんど変わりがないと述べている。

耳の聞こえに関しては、母親が呼びかけるとふり向くようになったのは最近であるが、TVのCMの音にすぐ気がつき、隣の部屋からでも飛んでくることがあるということから、ことばを覚えることや、人の話を聞いたりするにはさしつかえない程度には聞こえていると思われた。

発語器官の運動機能に関しては、笛やラッパが吹けること、ラーメンなどをすすることができること、せんべいなどの固いものを噛むことができ

ること、飲むときにむせないことなどから、問題はないと思われた。

#### 6) コミュニケーション能力

オシッコをする時に「チー」と言うとかウンチのときは母親の顔をチラッと見るとか、母親が指さしするとその方向を見るのは3歳ごろからである。ラーメンなど自分の食べたいものがある時、そのものがある場所にいて母親の顔をチラッと見て表わす。母親はその表情から欲しい、ということがわかるという。話しことばを人とのやりとりに使う能力の前段階として重要視されている、珍しいものを見つけた時に指さしして知らせる指さし行動(平均0歳11か月)はまだしていない。指さし行動に関しては、絵本を見る時に母親の指を持って絵を指すことや、すずめを見つけた時に「アッ」と言いながら指さしするようになったのは最近のことであり、その時、母親の方は見ていなかった。

#### 7) その他の行動面

“まね”ではないかと思われる行動も最近である。TVのピンポンパン体操を見て、手、足を少し動かす、母親がそうじを始めるとそうじきを使うかっこうをしたり、洗濯をし始めると洗濯物をかごに入れるかっこうを少し離れたところでしている。兄のあとをくっついて歩くなど。

絵本の中では、自動車や小鳥の絵をじっと見ている。その絵の出ている本を捜し出して見ていることもある。

クレヨンでぐるぐる丸を描いたりよこ線をなぐり描きする。2歳半ころはふすまに描いていた。

つみ木はビッチリ並べる。4～5個つみ重ねる。まわりのものがこわすとワーワー言う。泣き出して兄に噛みつくこともあるという。

水遊びでは、コップに水を入れてあけたり入れたりをくり返すとか、水でっぽうに水を入れてとばしたりしている。何時間でもやっているという。

#### 8) 初めて出会った時のようす、昭和49年6月12日

電車のおもちゃを横に並べる。じっと見る。寝そべってじっと見る。声は出していない。

つみ木をビシッとすきまなく並べる「しんご、しんご」と兄が呼ぶ。じっとつみ木の方を見てい

てふり向くことはなく、表情に変化がないように見える。スッとその場を離れる。歩いている時にギーギーギー、カッカッカー、ティッティーティーというやや聞きとりにくい音を発す。ブツブツ言っているが、何を言っているのかわからない。

ハトが部屋の中に飛びこんできた。母親がびっくりしたあとすぐに「ほらはらしんごちゃん、ハトハトよ」と3m離れた子どもの方を見ながら指さしする。3～4秒たってから母親の方に顔を向ける。ハトが飛び去ったあとだった。

母親の笑っているところにやってくる。母親の首に手をかけたあと衣服をさわる。母親の顔をチラッと見る「う？オッパイ？」と母親が言う。しんごちゃんは下を向いている。母親はとまどいの表情を示す。このような場でよいのだろうかというように「いつもこうなんです…」「どうぞ」母親は子どもの体をちょっとさわったあと「オッパイ出すのね」と言う。しんごちゃんはそばに立っている。目は伏せている。母親の衣服の首から胸に手を入れ肌をまさぐっている。母親は手をそえてオッパイをひき出す。しんごちゃんは目を伏せたまま乳首を口に含みすぐに出す。アッチャーダジャなどと言う。すぐに母親のそばを離れ、すぐまた母親の方に向きなおし、膝の上にたって窓の外を見る。そばにいる父親の方は見ない。10秒もたたないうちに母親のそばを離れる。

チョークを手にとって見る。そのあとすぐに口に入れる。そばにいたお姉さん(指導者の友人)が「あ、チョークだ」と大きな声を出す。近づいてしんごちゃんの口の近くに手をさし出すが何事もなかったかような表情に見える。お姉さんの方は見ない。母親がそばに行って「ベツベツ」と言う。ほとんど表情が変わらない。口をあけて中のチョークを出す。

しんごちゃんが指導者の近くに来た。ガムを食べていた「ちょうだいなー。」と指導者が言いながら口をあけていると、チラッと見る。

(どの程度の時間的経過があったのか当時の記録にはないが)指導者がしんごちゃんを見るとじっと見る。指導者が子どもを抱きあげる。体が固くなる。つっぱる。指導者の肩の上によじ登ろうとする。声を出さなくなった。緊張させことたを

反省しすぐに降ろした。

まわりのものに子どもの表情や行動を手がかりに、今の子どもの気持をくみとることがわかりにくい状態のように思われた。

### 3. 解釈と方針

初めて出会った時の子どもの行動の様子と両親の話から得られた情報によると、子どもはまだ自分の気持を人に知らせるとか、人の気持を受けとめるというようなコミュニケーション関係が育っていないと思われた。すなわち、生後1年～1年半の間に育つはずの、母親に対する信頼・愛着がまだ十分に育っていないと考えられた。

そこで、その育ちそびれた母子の関係をこの時点から乳児期の体験を再体験させることによってやり直し、一番身近な人である母親に「なつく」という間柄を充実・発展させていくこと、そのためには母親と子どもが一緒にゆったりと安定していられる時間、くっついていて安心という時間、いわば子どもが母親に甘えられる間柄を十分に保障すること、ひたすら子どもの守り手となって動くことが大切であると考えた。

従って、オッパイを吸うこと、吸わせることは母子が共にいる機会でもあるので、子どもが必要を感じた時にはいつでもさせてあげるようにと助言した。

### 4. 経過

しんごちゃんの変化過程を母親との関係、ことば、その他という観点でみていくことにする。

#### 6か月め：

母親がどこへ行くときでもくっついていて、(ごみを捨てる時、買物)母親がいなくなると泣く、捜しまわる。母親の移動と共におもちゃを持って移動する。何げなく母親の膝の上に坐りにくる。気がつくという。ごはんを食べていると膝の上にくる。ふとんを敷くと母親の背中の中にくる。母親を軽くたたいたり、鼻の穴に指をつっこんだり、オッパイを出してぺちゃぺちゃたたいたりする。「イタイ」と言う顔と顔をチラッと見る。TVに出てくる汽車を見て「キジャ」と言って母親の顔を見る。珍しいものを見つけた時に母親の顔を見るが多い。夜寝る時もオッパイをさわったりしゃぶったりしている。ことばが急激にふえて

きている。話すときは早口で言う。ピッチは高い。

TVを見て言うのはロボコン、マジンガーZ、ゲッターワンツースリー、ハイジ、ピンポンパンなど13語。本を見て言うのは、新聞、時計、ワンワン(犬)、オウマ(馬)、ぶどう、赤、青、黄ハニー(歯みがき)、パンチュ(パンツ)など21語、その他では、ウンチ、ズボン、線路、トンネル、ジュウス、オカアハン(お母さん)、写真、もしもしなど25語。TVの歌のうち一部分歌えるのが仮面ライダーV3、てんとう虫の歌、大きな栗の木の下で、など5曲。

体の部分で言えるのは、目、鼻、口、頭、顔、手、毛、耳、アンヨ(足)

二語文がでてきた。ヨウチエンイコウ。アンカイこう。オウチに帰ろう。アンカでネンネなどの助詞が使える。

食べものの関係の名前は、オチュユ(おつゆ)、ごはん、ハシ、スプーン、人参、大根、カッカ(魚)など44語、スッパイという形容詞も言う。ヨイショ、などの掛け声ことばを言う。

絵本を見ながら声を出している。うるさいくらいに声を使うことが多い。

「ガス消して」「窓を閉めて」「かごを持ってきた」というようなことばは聞いてその指示に応じることができる。

指を口の中に入れるようになった。

この時期に子どものできることとしては、道順はすぐに覚えるなどの記憶力のいいこと、手先の器用なこと、運動面は活発なこと、物の使い方を知っていること、衣服を脱ぐのが早いこと(着ることはまだできない)であり、三輪車に乗れないことが気になっているとのことであった。

#### 臨床場面で観察されたこと

母親が坐っているところから2mほど離れたところで電車のおもちゃをながめている。10秒ぐらい見たあとパッとふり向いて母親のところへやってきて母親の洋服のボタンをはずし、オッパイをとり出し、口に含みチューチューと吸う。ギュッと噛む。母親の顔は見ない。10秒ぐらい吸ったあと電車のおもちゃのところへ行って電車をさわる。そのくり返しをする。乳首を噛んだ時、母親が「痛い」と顔をしかめても母親の顔を見ない。電

車のところに戻ると母親の目をまっすぐに見ることがある。オッパイを吸うという行動についてはオッパイをもっている“もの”に近づいてそれを吸っているように見えた。<sup>(1)(2)(3)(4)(14)</sup>Halowの代理の母親サルの実験のサルの行動と似ているように感じた。

母親のそばにはいるが、すぐにゴソゴソ体を動かしたりしており、私の目には“ゆったりしている”ようには見受けられなかった。

母親に、子どもがくっつくということについて聞いてみた。母親は「このベッタリには耐えられなくなることもある」と述べる一方、「今のしんごちゃんにこれがいいのなら今の私が耐えることなのだと思う」と言う。

父親に同じ質問をしてみたところ、「凝視に耐えない。何とかならぬものか」と述べた。「6か月の変化は？」という質問に関しては「単語がポツンポツンと出てきたことが変わってきたこと」であり、あとは「年相応のことができない、分別がない、話しかけても答えない」というように、いわば今の子どものできていない部分を見つけ、他の子どもとの比較をし、それで悩んでいるというように見受けられた。

母親の膝の上に乗るとか、くっつくというような状況にあるとき、子ども以外の母親や父親の気持が子どもに伝わり子どもに“ゴソゴソ”するという動きにさせたのであろうか。

母親の気持にいわば負担をかけることになったが、今子どもが母親にくっつく、ということで安定を求めようとしていると思われるので、その“時”を認めてもらうことにした。

7か月め：

ますます母親にくっつくようになった。母親の顔に唇をつけることをするようになった。

オトウサン、カイシャ、デンシャというようにことばがつながることがある。

絵を描くとき、オメメ、オミミと言って描く。電車を動かして遊ぶようになった。

9か月め：

母親が腰かけるとその上に坐り、母親がたつまで坐っている。おんぶをしてもらいたがる。寝る時、母親の顔を自分の方に向けておく。母親が追いかけてこをしかけると、逃げて母親の方をふり

返り、母親の目と合うとにこっと笑う。絵本の中の絵を指さし、母親の顔を見て問いかけるようにすることが多い。ものの名前を言ってもらうまで指している。自動車と電車の車種を聞く。「これ何？」と母親が問うと、イスズフロリアンなどと10数種類答えられる。

小さい遊具で遊ばなくなった。イスやかごを並べて「食堂車」などと言ってほんものごはんを持っていき、イスにこしかけて食べるまねをしている。ハシとスプーンなどで三角形や四角形をつくる。のりなどを髪の毛につける。

10か月め：

朝、ふとんの中から「オカアハーン」と呼んでふとんに入ってきてもらい、30分程度くっついてから起きる。母親の姿が見えないと「オカーハーン」と呼ぶ。見つけるとにこっと笑い顔をくっつけにくる。おんぶよりだっこの方をせがむ。外にいくときおんぶするとすぐに母親の胸のところに手をまわしてくる。こたつの中で母の膝の上になると1時間ぐらいいる。母親がクリームをつけていると「しんごも」と言う。母親の目を唇で吸う。カーテンでする、イナイイナイバーを喜ぶ。

体でリズムをとるようになった。

爪かみがひんぱんになった。ゆったりしている時にもする。ほっぺたをさすったり、耳をさすたりすると気持よさそうに目を細めている。三角や星型の型はめができる。ツバキを口の中でクチャクチャしたり、はいて指でこすったりする。自分の片手を見つめていることがある。キャラメルなど前は紙をむいて食べていたが今はすぐ唇をつける。外で母親と一緒にブランコに乗る。戸が少しでもあいていると見に行き閉める。

この頃、母親は毎日のように夜「母親への手紙」を読み直しているという。父親は心配はするが子どもと一緒に動いてみる、ということは余りみられないということだった。

11か月め：

「ここかゆい」、「オウマ」とか言いながら働きかけてくることが多い。母親にくっついてじっとしていることが多い。同じ敷布団に寝る。母親が視野からいなくなると捜しまわる。「ここにいるのよ」と言う顔を見てにこっとする。

鉛筆を持つと「カミ、カミ」と言う。紙に線描きをする。

ツバキでクチュクチュすることはしなくなった。水の流れをじっと見る。何でもにおいをかぐ。戸が開いているのは気にしなくなった。はしなどものをたたいていたがすぐにやらなくなった。ひき出しのものを全部出す。自分がつみ木を使っている時、人が少しでもさわるとワーワー言う。父親はその様子を見ると、一生続くのではないかと考えこむという。

父親は心配顔でムツリしていることが多い。父親が「しんごお早よう」と言うと、知らんふりをしたりする。父親はやっぱりこの子はダメなんだと思ってがっかりするという。

母親は子どもとの距離が短く、つきあうことも多い。この子にはどうするといいいのかということがかだんだんわかってきている一方、父親は心配がふえるばかりで子どもの変化が見えない。父親の心配顔を見るだけで母親は気持ちが迷入ってくる、と話していた。

母親が1か月に一度ぐらいの周期でひどい頭痛がある、ということはこの頃知った。

母親が具合の悪い時、母親のそばでイスなどを並べて遊んでいたという。

1年め：

オッパイをまたさわり出した。母親のオッパイをとり出しておもちゃのようにもて遊んでいる。母親の顔に顔をつけにくる。母親の膝の上で寝入ることがある。珍しいものを見つけた時、母親をその場にひっぱっていくことがある。

やや尻上りの話し方をする。動物の出ている絵本の動物の名を言ってやると聞いている。たとえば「アヒルが池の中にいるね」。同じような絵を見ると「アヒル」と言う。あっちへいこうと言うとその方向へ行く。「お父さんどこへいくのかな」と聞くと「オベントウモッテ」と言う。夜寝る前に一日起こったできごとを簡単に話をするのを聞いて寝る。

外に出るようになった。ひとりで砂場に出て砂をさわったり、ブランコに乗っている。砂場で遊んでいる子どものようすを見ることがある。母親は子どものそばに行っていて見ている。補助つき自転車

に乗れるようになった。靴下などをさわりにくる。

母親はしんごちゃんの気持は100%近くわかるという。父親は、しんごちゃんのことを考えると食事がのどを通らず、夜も眠れなくなっている。医者にみてもらったところ精神的なものだと言われた。母親は父親のそういう姿を見るといやになるという。父親は先のことを心配して今やれることをしないんだからと。

父親の不安を少しでも和らげることが急務のように思われた。しんごちゃんはこの1年間の間にことばの面でも他の面でもかなりの成長が見受けられるのに、父親の悩みは、以前にもまして増えてきているようであったからである。父親をそこまで追いこんだのは何なのか。

子どもの成長は子どもをとりまくまわりの人たちが子どもが成長しやすい状況をつくっていくことが大切である。母親が暖かい目で見守り、よかったよかったと受けとめているその同じ屋根の下で、その同じ子どもを見ながらじっと考えこむ父親の存在は、母親の気持ちを追いこむばかりでなく兄や子どもにまで影響を与えと言っても過言ではないであろう。

父親の不安の“根”を探るために、父親との面接を行なった。

父親との面接、昭和50年6月10日、1年め。

ℓ：指導者、F：父親

父親の感じ方、今の考えを知るために、話の内容をほぼ全文記述する。

ℓ：しんごちゃんについてどのように思っていますか。

F：要するに理解力がゼロに等しいです。ちょうど1年になります。病院に行ってから。その病院で言われたことが心の中にあるんです。知能の遅れ、精神薄弱児ということが。今だもって気になっていて、これからどうなるかと思って……。何事も精薄に結びつけてしまうんです。他の子どもと比較してはいけないと言われていられるけれども、比較してしまうんです。比較すると他の子どもと違いすぎるんですよ。きのう家内に言われたんです。私が先のことを考えすぎるんじゃないかって。それも事実です。ですが、違いが接近してきてふつうになるというの

は考えられないし。どうするといいいのか……。まるでわからないんです。

ℓ：どうなっていくといいと思ってらっしゃるのでしょうか。

F：将来、自立しなければいけない。社会に順応すること、自分で自活するようになること。しんごは自活できないのではないだろうか。父親としては今をどうしたらいいのか。アドバイスは受けているのですが。

最近の理解力をみると進歩がないですし……

ℓ：理解力とはどういうことですか。

F：私たちの話しかけに対する答です。それが全くないです。理解力ゼロとは、質問に対して私の考えられる考えが1つでもあればいいんです。

ℓ：たとえばどういうことでしょうか。

F：たとえばしんごに「お早よう」と言っても知らんぶり「お父さんこれからどこへ行くんだ」と聞いても答えはない。夕方「ただいま」と言うと返事がある時とない時とがある。「お帰んなさいって言っただろ」って言わないかぎり言わない。

食事をする時でも自分の決まった場所があるのにそこで食べない。私の膝の上にも乗ってくる。いろんな場で食べる。疲れているからまわりつかれるのがいやなんです。おこっちゃんいけなから膝の上で食べさせてはいますが。自分のものも人のものも見分けがつかない。

TVは部屋にいる限りずっとつけている。何を見ているのか私にはわからない。画面が写って声が出ていればいいのか。TVは自分の好みのチャンネルにだけ回すし……

最近はやっとなくなったけど、イスを並べて汽車のつもりだと母親は言うけれど、私がちょっとふれるだけでも部屋から出ると言う。口で言わない。手で出る出るというしぐさをする。

ℓ：そういう時お父さんはどうなさるのですか。

F：最初抵抗するんです。いすに坐るんです。するとものすごく怒る。ワーワー言う。「どいて」と言うんだよ、と私が言うのと「ドイテ、ドイテ」と1～2回言う。しかたがないから部屋を出るんです。

風呂は私が入れる。最近はおもちゃ電車を持ちこむようになった。石けんを自分の体を洗わ

ないでタイルにすってみたり、おもちゃにして困ると思うけど、あんまりおこってはいけないというので、ほっぽってあるけど。風呂に入っているとき1～10までかぞえて出るようになった。……

最近の外に自分で行くようになった。やっぱりこれは家の中にじっとしていることができなかったのではないかと考えている。

先週日曜日、公園で会社の園遊会で花火があがっていた。見に行った。土曜日に見に行ったら風船をくれた。次の日もくれるということだった。自分の方から行った。ついて行った。みんなが遊戯している中に入って往生した。やたらにみんなが運動している中に入ってあっちフラフラ、こっちフラフラ。いやがるんだけど抱いて連れてきた。全く知恵が遅れているからやることなすことこういう程度のものしかできないのか……。

ℓ：こういう程度といえますと？

F：日曜日の遊戯会のときに、いっちゃだめと言うのにわけもわからずにボーと立っている。もう4歳になったのだから親の言うことをもう少しわかったらと思うのですが。

ℓ：4歳だとどういうことができるといいのですか。

F：個人差があるだろうけれども分別がついてもいいのではないか。分別とは親の言うこと（命令）をもう少しわかってもらいたい。

ℓ：親の命令とは？

F：世の中の規律です、これはいけないと言われていたようなことはやらないということです……

ℓ：知恵遅れについてお父さまがご存知のことはどういうことでしょうか。

F：友人に特殊学級の先生をしているのがいる。定義について聞いてみた。文部省の規定でIQ75以下を言う。どうやって出すのかと聞いたらテストした先生の判断によって決まる。Aという先生がテストしたときに80、Bという先生がテストをしたときに70、10の差がある。Aの先生はこの程度ならまあまあ。Bの先生の判定ではそうではなかった。判定員の判断で決まるのでIQ75で決めているが該当しないこともあ

る。IQ75という説明をしてもらったんです。

ある病院で先生にみてもらった時にことばの遅れが何からくるのか私にはわからなかった。病院にはことばの遅れの原因について聞きに行った。テストをした結果知能指数の遅れが目立つと言われた。それから近くにある養護学校に行き先生に会った。私の疑問を聞いてくれた。病院で言われたことがうそであったらいいなあと思って。子どもを見ないとわからないと言われて一応連れていった。昭和49年5月15日ごろ行った。違う先生が見てくれた。パンフレットを読んでもらった。こういうふうになるのかどうか聞いてみた。運動能力をみてくれた。結論として精薄とは言わなかった。その後も二度ばかり養護学校に行った。校長先生に会った。話を聞いてくれた。49年6月だった。子どもの状態を聞いた。精薄だと第一に気づくのは、ことばの遅れ、と言った。TVをかけていてリズムをとるか、食べものの名前を言うか。単語がどんどん出てくるのかを聞かれた。子どもの散歩をさせているときに養護の先生に会った。子どもをみてもらった。先生は医者じゃないから決断は下さない。だけど私にはその時の感じとしては子どもが小さいだけにわからないが、やっぱり精薄ということだと受けとめた。

友人の先生にも家に来てもらって見てもらった。友だちは自分には情緒障害か自閉症の方が合っている、そういう傾向があると。情緒障害とかについてはどういうことか知らなかった。あの病院の話をしたら、有名な先生は診断を頼まれて決断を下さなくてはならない時に、そういう先生は「私にはわからない」ということは言わない。小さい子どもであればあるほど当る可能性は少ない、と言っていた。

ことばが遅いというのが知恵遅れの第一の原因ということを聞いてた。2歳6か月のとき小児科の医者から「2歳6か月でことばの遅い子どもはいっぱいいる。親の言うことはわかるんでしょ」。その時理解力はゼロでした。

養護学校の先生に家に来てもらって質問をした。「養護学校の生徒さんをみていて先生方が一生懸命やっというはわかる。訓練

して光明を見出そうとしていらっしゃる。やっぱりだめなんでしょうね。」先生は「そうは思わない」それを聞いて、だめだと思っているんだけれども訓練してみても何とかしてみよう、と受けとれた。だけど養護の生徒を見ていてとても自立していくようには見えない。知恵遅れは訓練でもダメなんじゃないかと思っている。

区立の児童相談所にいったことがある。49年5月だったか。係の人が質問に答えてくれた。子どもの状態について話した。その時の話の中に「要するに精薄というものは盲腸などとは違って切り取ってしまっても治るというものではない。精薄は薬や手術では治らない、」だった。

ℓ：将来のことについては？

F：社会に出て順応して、自立してくれればいい。

ℓ：どうするといいいのでしょうか。

F：わかりません。

ℓ：お母さまは何かおっしゃっていますか

F：家内とは意見がくい違っています。私が悲観的だと言います。私が悲観的なことを言うと母親が反対する。私が反対を言うのがかえって気休めになっているのかもしれない。2人でもってダメだと言っているけどどうしようもないから。

ℓ：お母さまについて何か。

F：がまん強いと思う。よくやっているように思う。今は家内はここで言われる通りのことをやっている。それでいい。しかたがないと思う。それしか方法がないから。自分たちで考えて方向づけができないんだから。

ℓ：不満や疑問に思っていることは？

F：別にありません。

ℓ：みどりのパンフレットを読んで下さいましたか？

F：ひと通り読んだ。表面的にはすばらしいと思う。私には結論がない。この通りの指導方法でやった場合、親の悩みが解消できるのかどうか……。

ℓ：とりあえず心配なこととか願いとかございいますか。

F：1つは今後の幼稚園の入園のことが心配。きのうの話だともう少したってからがいいとのこ



とでした。何だったら待ってもいいと思う。もう1つは、親の言うことに対してもう少し反応を示してくれないか。“気持の通いあい”が欲しいです。

ℓ：しんごちゃんの変わってきたことについてこういうことかなというのがありましたら。

F：単語が1年前は20ぐらいだった。単語はふえたと思う。ことばにはならないが。2つつづけばことばだと思う。はたしてこれで大文夫なのか。

接する時間が母親ほどないのであんまりかわっていないように思う。

ℓ：どうなるといいのかな。

F：ことばがしゃべれるようになって、気持がづながってくれば、とりあえずここ2～3年はいいかと思う。

ここの指導法でやっていくしかないと思うのです……。

話をすすめていくうちに、父親自身が自分の方向というものを見つけ出したように感じる事ができた。父親が子どもとのつきあい方についてとまどった時には、母親はたいいよくわかる人なので母親に聞いてみることを勧めた。

話し合いのあと、母親から、父親が大変協力的になったこと、そのことで母親は神経を使わないで接することができるようになった、という報告を受けた。

## 5. 1年後から5年半までの経過

1年1か月め：

ものなどに興味をもたない時にオッパイを吸っているように見える。そば屋に入って長靴のままタタミの上を歩き、人の食べているそばのドンブリの中に手をつっこみ食べた。すぐに店の外に出て、そば屋の前で言って聞かせた。半分わかったような顔をしていた。母親は情なくなつて涙が出てきた。母親の顔をなでて、じっとのぞきこみ、しんごちゃんも涙を流していた。それ以来そば屋へは寄らない。

本を並べて置き、母親の指を使って絵を指し、母親にももの名前を言ってもらう。欲しいものの名前を言う。「ここ書いて」、「牛乳おかあはん」など。

TVは見ないが消すとすぐに気がつく。つける。エレベーターの階を示す数字をよく見ている。お茶などを入れて「お父さん、お母さん、お兄ちゃん」と言って飲むまねをしている。たまに母親のところに持ってきてくれる。

1年3か月め：

ウサギなどのぬいぐるみを持って電車遊びの時のお客さんにする。イスなどをいくつも並べ「オリまーす、トンネルに入りまーす、トウチャクで一す。」などと言っている。

天気図を描かせる。鉛筆を持ってきて「カイテ」う言う。「何描くの？」と聞くと、「ホッカイドウ」「ゼンセン」「ホクイ」などと言う。人の顔の絵は、髪の毛、目、耳、まゆ、口鼻のある絵を描く。

耳、まゆ毛、ヒゲなど体の部分を問うと指す。「ちょっと待ってね」と言うのを待っているようになった。

兄の学校に入りたがる。兄が帰宅すると喜び、あとをくっついて歩く。兄のしていることを見ている。近所のすみれちゃんという女の子が遊びに来ると、ぬいぐるみ人形などで同じようなことを少しやる。砂場で他の子どもに砂をかけられた時、砂をかけ返した。

1年5か月め：

犬を見つけて「ワンワン」と言い、母親の顔を見る、というようなことがふえてきた。

ウサギのぬいぐるみを抱いてきて母親に「おやつちょうだい、」汽車のおもちゃを見て「ポッポ、キシャポッポ、シンジュク、ケイオー」と言いながら汽車を取りにくる。電車の中で浅間高原のポスターを見て「アサマ」と言う。母親が「アノー」と話しているとほとんど同時に「アノー」と言う。

粘土を使う。だんごにしたり切ったりする。だんごを母親のところに「ハイ」と言ってもってくる。母親が「おいしい」と言うのを見て喜ぶ。

1年6か月め：

家事をやっていると「トミカのマチつくろうよ」とか「オカアサン、アンカ、アタロウよ」などと言って母親の手をひっぱる。暇そうにしていると膝の上ののり「オカアサン、オカアサン」と言わずっと長い間のっている。「ハナ、ハナ」と言いながら母親の顔にくっつける。母親がうでぐみす

るとそのかっこうをまねして笑う。泣きまねをするとのぞきこんでくる。母親がトイレに入っている、戸をドンドンたたいて中に入ってくる、「オカアサン、オカアサン」つ言ってくつつきまわっている。外に出た時は、母親の衣服をしっかりとつかんでいる。ちょっとでも姿が見えなくなると「オカアサン、オカアサン」と大きい声を出して呼ぶ。母親を見つけると「ウーン」と泣いてしがみつく。母親の目などをつつく、まゆ毛をなめたり噛んだりする。

バケツを持って「お母さん外にいく」と言って外に出る。砂場でバケツに砂を入れ、小さなカップに砂をつめて母親のところに持ってきて「コーヒー」「クリーム」などと言う。母親が食べるまねをして「ごちそうさま」と言う。「どうも」と言う。おじぎをすることもある。

ひらがな文字を「書いて」と言う。ケーキ、サクランボ、イチゴなどの食べものや電車などを母親に描かせる。自分では線路やマルを描く。声をよく出している。

「今日は冷たくて、おなかいたいいたいになるから、アイスクリームはだめね」と言うとか聞くようになった。「レコードかけようか」と言う。「イヤナノ」と言う。

臨床場面ではおもちゃの電車を手に持って部屋の中を忙しく移動しながら、臨床者の方をチラッチラッと見てそばにいる母親の肩をそっとさわる。目を伏せていることが多い。母親の手をひくとか母親にくっついていいるということがほとんど見られなかった。母親の心配としては、質問をしても答が返ってこない、ということだった。母親の話による家でのしんごちゃんの様子と臨床場面のしんごちゃんの様子の違いに気づきながら何故その違いが見うけられるのかということはよくわからなかった。

1年7か月め：

母親にベタベタすることが激しくなった。特に母親が家事をしている時には「アンカ」と言って手をひっぱるとか顔をくっつけたり肩車してくる。くっついていいるうちにトローンとして寝入るということはない。母親が歌い始めると母親の口をふさぐ。外に出ることが少なくなった。ベラン

ダでどろんこをこねたりしている。

一日の母子の生活を聞いてみると、母親の動きを見ながら追っかけてくつつきまわっているしんごちゃんがいる。母親が家事をしている間は、その時だからこそ一緒にいたいという様子がうかがわれた。母親から「待っててね」と言われたり、「～しなさい」と言われている。母親に言われると、「イヤ」と言えない状態<sup>(17)</sup>のように思われた。

この時期に Tinbergen<sup>(17)</sup> の考えに学んでいる。しんごちゃんも萎縮しやすい子どもなのではないかと考え、しんごちゃんとのつきあい方を今一度見直してみることにした。

1年8か月め：

母親としんごちゃんとの毎日のやりとりをみ直してみると、母親が何げなく叱ったり、問いかけたり指示したりしていることがあった。お兄ちゃんを大声で呼ぶとビクッとするとかTVのCMの音にビクッとすることがある。いずれもしんごちゃんにとってはたいへんなプレッシャーになっていると考えられた。そこで、指示や問いかけを減らしてみた。アンカの時間をたっぷりとることや外に出る時にはおんぶしてねんねのまま出かけてもらうことにした。しばらくすると、毛布を出してきて母親に「ネンネ」と言うこともふえた。

朝、カーテンをひくこと、皿を洗うこと、など母親の手伝いをする。絵本を持ってきて絵を指し「コレ、コレ」と言う「オジチャン、コウジシテル、オジチャン」などと、見つけたものを指して母親の方を見て言うことがふえた。指すことがふえた。オッパイを噛むことがふえた。

臨床場面では、母親の膝の上にいても「オカアサン」と言って母親の顔を見る、「コレ、コレ」と言いながら母親のところに絵本やつみ木を持ってくる、ことが見られた。

つみ木を横に並べ「イチ、ニ、サン……」とひとつずつ11まで数える。地下鉄の駅名はほとんど読めるという。

1年9か月め：

バスのクラクションや電車のアナウンス、などの音がした時、両耳を手でふさぐ。母親にもたれかかる。母親がしばらくの間体をたたきながら「大文夫……」と言っていると手をおろすという。

電車遊びでは、新幹線の駅名を東京から博多まで言う。戸の開閉をしながらひとりでエレベーターごっこ、「はい1階でございます…次は2階でございます」をする。大きい声を出すようになった。ものを並べ、「下さいな」と言う。「はい」と言ってものを渡すというやりとりをする。

2年めから1か月間、母親が頭痛と子宮出血の為臥っていた。その間母親のそばにいておとなしくひとりで遊んだり、ふとんのそばで坐っていたという。

#### 2年1か月め

一日の生活は6:50ころ目覚める。母親のオッパイをさわる。母親の目をさわって開ける。顔をくっつける。母親が起きるとTVのスイッチをつける。母親が洗濯をしている間、TVのボンキッキやピンポンパンを見ている。10:00~10:30ごろ一緒に外に出る。砂場で山やトンネルをつくる。水をくんで川をつくり、どろんこをこねる。ブランコや自転車にも乗る。昼ごろ家に帰り昼ごはん。兄が帰宅。「しんごいこう」と言われるとついていく。40分ぐらいで帰ってくる。2:30~4:00ごろ「オカアサン、オツカイニイコウ」。夕食の買物をして帰宅。兄とボール投げや追いかけっこをする。夕食後はアンカの中ですごす。絵本を持ってきて、母親に「ももたろう」の話などをしてもらう。

「ボク」と言うようになった。話しかけると「ウン、ウン」と言っとうなづく。ひらがな、カタカナの50音字とが、パなどは読める。やや早口にしゃべる。大きな音がした時に両耳をおさえることはしなくなった。

2年4か月め、自家中毒を起こす。この頃時々起こしていたという。

父親と風呂に入るとき「オトウサン、オフロハイロウヨ」と言う。父親が坐っているとよりかかったりするようになった。兄とはTVのチャンネル争いなどをするようになった。兄は「お母さん、ぼく、これから本気でするからね」と言う。

2年5か月めから、1週に一度のお茶の水女子大学児童学科の要助児研究会（小集団活動）に参加する。

#### 2年8か月め

一日の生活は7:00前後に起きてから寝るまで母親のそばにいる。外に出て遊んでいる時は母親は1mほど離れたベンチに坐って見ている。時々母親のところにやってきて10分ほどくっついているという。

アノー、エートということがふえた。

数字は1から10まで書ける。122はひゃくにじゅうにと読む。ろ、り、し、へ、つ、く、は書ける。くりのくなどと言うと文字カードをとる。絵本の文字を読む、うんてんしゅさん、でんしゃがなど。母親に文字を書かせることがふえた。半濁音、そく幼音もわかる。アルファベットの26文字が読める。12色がわかり「あおは？」と聞くと指して答える。マンガや日本昔話などのTVを30分間見ている。ピンポンパンの工作の時間に「つくる」と言って同じものをつくる。ハサミが使える。セロテープやのりも使う。絵は、お父さんの顔、お母さんの顔と言って描き、描かせる時は洋服も描かせる。ひよこ、電車、汽車の絵も描く。

この時期に、しんごちゃんの育ちについて話した。今は母親と望ましい間柄になっていること、それをこれからも維持することを再確認した。

3年4か月め、自家中毒で9日間入院。母親との間では困ることはほとんどない。母親が聞くと名前、年齢、住所、家族の名前や電話番号を答える。絵本を見せて「何？」と聞くと「バス、海、ふみきり」などと答える。ことばのテスト絵本のテスト3のブランコをとりっこしている絵を見せて「何しているのかな」と聞くと、「ブランコにのっているの、すみれちゃんがのっている」という。」自分の名前が書ける。

自動車、階段、駅のもようを絵に描く。空箱に穴をあけて工作する。母親と店やごっこをする。

この時期にしゅうちゃんに学んだ見方でしんごちゃんの場合もみ直してみた。泣く、スッと離れるとか、今しゃべっていたはやさより早口のしゃべり方になる、声のピッケが高くなる、などがあったとき、今のしんごちゃんは“いやな、困った状態”と見なし気持ちをしずめるようにする。たった今の、またはその前のまわりの人のつきあい方を修正していくようにした。

昭和53年4月に学齢を迎えていたが1年猶予す

ることにした。

#### 4年め

近所の子どもと遊ぶようになった。いやなことがあると家に帰ってくる。母親は子どもの泣き方でころんで泣いたのと子ども同志のトラブルで泣いているのか、ということの区別ができるという。本を見ていてわからないことがあると「これ何?」と聞く。母親の仕事中に「何しているの?」と聞くことも多い。

10までのたし算、ひき算ができる。「5と5でいくつ?」「10」「5つから3つひくといくつ?」「2つ」。「いたずらおぼけ」どう本の筋は暗記するくらいになった。

#### 4年3か月め

「お母さん、今日、お茶の水の大学にいくの?何時ごろいくの?」「そうだね、11時45分ごろだね」「帰りはね、丸の内線で帰る」会話はそれほど長くはないが日常生活には困らないようになった。

近所の子ども5~6人と遊ぶ。追いかけてこをしたり自転車、ブランコで遊ぶ。「~ちゃん」と呼んでそばに行く。20—30分1箇所遊ぶ。ころんで泣いている子どもがいたら、手をとって起こしてあげる。

プールで泳ぐ。砂場では土を掘ってトンネルづくり、木を使って高速道路、車庫、鉄橋づくりをし、電車を持ってきてその中で動かして遊ぶ。ブルートレインの本や「くずのはやまのきつね」の本う好んで見たり読んだりしている。折紙ではコップなどが折れる。母親がやるのを見て折る。時計が読める。

就学を迎えるに当って、親がいわゆる学習面をしっかりさせたい、その他の面でも他の子どもとの差が少なくあってほしい、ということを感じているようであった。今の時期であるからこそ、よりていねいに、みてみて、子どもに無理をさせていないかどうかを見直すことにした。話しかけているのにまゆをしめかめること、目をそらすこと、返事をしないことなどは今のつきあい方が子どもにとって“困った”状態だとくみとってただちにやめること、そしてひき続きそのようなつきあい方はしないというように、子どもの反応を見なが

らつきあってもらうようにお願いをした。

#### 4年5か月めから2か月間自家中毒で入院。

自家中毒でみてもらっている病院の小児科の先生から次のような質問の手紙がきた。

当院入院前に何回となく嘔吐、腹痛で他医にも入院をくり返し、11月に当院に入院。点滴し1~2日で軽快します。検査上尿アセトン(++)以外に低血糖なく amylase、肝機能も正常で外科的疾患もなく周期性嘔吐症(自家中毒)と思われます。この疾患はPsychogenic Factorが強く、EEGもとりましたが大きな spike feverもなく、特に治療はしておりません。

また言語遅延の形とかで先生の方の方針にそって今後も合わせてみていかねばならないと思っていますが自家中毒様症状が4~5才から出現していることや親子(特に母子)関係の面で患児の場合 psychogenic factor が強く外泊させましたら強く症状が出たりします。

以上①いつまでも母子間の親子関係を今のまま続けたらいいのか、②学校の問題、③しいては自家中毒様症状の改善のための良き方針などありましたら御検討、御指示下されば幸いです。

当料での自家中毒からはもう少し児を独立心を与えた方がよいのですがその点ご検討下さい。母親に混乱を与えぬためまず先生の方に父親を受診させますので御相談の上御一考下さい。

手紙の返事を書いた。

……しんごちゃんについての所見とご質問の手紙を拝見いたしました。「母親の混乱を防ぐため」の格別のご配慮をいただきありがとうございます。お世話になりました。ご心配をおかけしました。

しんごちゃんには、54年1月10日にご両親ともにお目にかかりました。

(……中略、この間に現在までの経過等について記述)

……しかし今なお突然見慣れない人から話しかけられたり質問されるとひとり言を言ったりすることがある、というように対人行動の面でまだおびえや萎縮傾向を示すことがある。それはしんごちゃんの、今頃は困っているという信

号であると考えられる。今でも外に探索に出かけては家に帰り母親にくっついていて安定しているようである。この状態が出会いから今まで保たれていることが現在の進歩につながっていると考えられる。

#### 意見

たび重なる自家中毒に関しては、なぜおきるのかという心因性の要因については十分つかみきれていません。ただ不安緊張レベルが恒常的に高い状態のため、しんごちゃんにとってまわりの人のほんの軽いつもりのことばやかかわり方が子どもには負担になり、それが食べ続けることや食べ過ぎることにつながっていたのではないかと考えております。食べ過ぎることや食べ続けるというような行動をおこすというにはきっかけというものがあるのでしょうか。子どもにはやむにやまれぬ、そうしないことはかえって具合の悪い状態になる、ということの信号行動のようなものであると考えております。人間関係におけるさまざまなストレスというものと関連があるのではないかと思いますので注意して見ているところです。自家中毒が繰り返し起こっても、子どもにとって一番安全で信頼のおける安心な母親が居たこと、その母親が子どもの具合の悪いときに守ってくれたことがそれ以上に悪くさせなかったのではないかと考えております。私どもはいわゆる甘やかashiをしてきたからこそ、ことばや行動面においても向上発達し、安定してきたものと考えておりますし、その基盤があってこそそれに伴って独立心というものも除々に、ひとりで育ってきているものと考えております。

就学に際しても今後のつきあい方についても今までの方針を基盤にしていくことが大切である、ということをご両親には話しておきました。

入院するとおさまり、外泊すると再発するという事実については納得のいく説明は得られませんが、そろそろ時には母子分離が有効に働くところまで成長してきている、というところかもしれないと考え、就学という体験がどう動くか見守りたいと考えております。……

昭和54年1月、4年7か月め、7歳9か月のとき、区の教育委員会で就学前の検査をした。名前を読むこと、書くこと、くつひもを結ぶことと数の計算、マル、ダイヤなどの形合わせとその模写など全てできた。ことばのやりとりもできたという。学区の普通学級に適するという判定を受けた。

昭和55年4月入学。

母親から1か月半の学校生活の状況報告の手紙をもらった。

…まだ一日も休むことなくどうやら学校へ行っています。4月5月とツベルクリン注射BCGとか尿の検査やらといろいろあってその日になると「今日は学校休む」と言ったりぐずぐずしたりしていました。今日で体に関することは終りの様です。やれやれです。

布団の中でオッパイを吸い、学校に行く前にオッパイを引っぱったり出していじったりして、玄関で「お母さん待っていてね」と三回程言っています。今日は1時30分頃帰ってきます。その日に依って「ただいま」の聲がちがいます。すぐわかるので大きな声で「お帰りなさい」と言い私も一安心といった所です。帰ってまたオッパイ遊びをします。

午後は3時頃お使いかたがた公園で遊ばせて6時頃帰ってくるといった毎日です。休みになると「どこかへ連れて行ってよ」とせがみます。なるべく連れて行くようにしています。上野動物園、浅草観音、お父さんの実家に行ったり。明日の日曜日はお父さんも休みなので東京大仏に散歩がてら行ってみようかと思っています。

私も少し気がゆるみました。友達とのやりとりはできても、まだ友達との遊びの楽しさはわかっていません。先生の教えがいつも体の中に入っているのでふんふんと聞けるようになりました。でも時たま、これでいいのかしらと反問します。時折いただく手紙を見て、ふんこれでいいんだな……と安心したりしています。

ほんとうに感謝しています。……

お蔭様でお父さんがとても明るくなったとお父さんの実家の人たちが言っていました。

近所のお母さんから「しんごちゃん学校に行

っているんですか」と会うと聞かれたりしました。私から離れて学校に一人で行っているのが不思議のようです。……

自家中毒も今の所なく元気です。お父さんの泊りの朝は電話で「しんご学校に行ったか」とかけてきます。神経質なおやじだと思います。

言葉も多くなりました。まだ学校でのあった事や自分の気持などは言いません。…が明日持っていくものとかは忘れなく担任の先生からの連絡(しんごが先生に何か書いてくれとせがんだそうです)帳には、毎日元気でやっています。これと言って書く事はありません。できたら家庭で字の練習をさせて下さい、との事でした。私もだまって見守るつもりです。

体にはくれぐれも気をつけて下さい。先生に病気になられると心の支えがなくなりますから。では又書きます。…

#### 5年6か月め

二学期が終了した。あゆみ(通知票)にはよいのは国語の童話、物語を楽しんで読むことができる、算数の3ケタのたし算ひき算ができる。図工はのびのびと描ける。もう少しというのは、体育の全身運動を、であった。先生は余りにも純心すぎる、という評を書いている。

音楽はピアノ、木琴で5～6曲暗符でひくことができるし歌もよく歌う。最近になってプール教室に通い、1週間たたないうちに泳げるようになった。6級に挑戦している。友だちと競争しながら一緒に通っている。なわとびも20回とべる。

文字を書くこと、計算することがたいへん早くブロックで電車やプラットホームなどを組み立てるのもす早い。「ふたごのでんしゃ」の物語が大好きで、その内容をブロックやミニチュアの人形などを用いてひとり遊びをする。

母親はこの調子でのびていくといいなあと思っているし、父親もやっと心配することが減って気分が楽になってきたという。

#### 6. 今後について

今後とも今の安定した母子の間柄、家族関係を大切に、そしてその間柄を変わずに保障していくことであろう。言語では国語学習の面を気をつ

けてみていきたいと思っている。

#### 考察

しんごちゃんの経過をみると、ことばも対人行動の面でも、いわば“無理なく”育ってきている。“無理なく”育つには、それなりのものがあつたと考えられる。そのわけについて考えてみた。

##### 1. 行動の理解のしかた

しんごちゃんの経過の中で、さまざまな問題があつた。オッパイを吸うことについて、いったいつまで続くのか、やめさせられないのか、異常ではないのか、というような、時期や見方について問う問題と、しんごちゃんの自家中毒を起こす要因や対人行動の面での萎縮傾向を示すということについて、なぜなのかを問う問題が起つていた。

今子どもが求めているということには何かわけがある。その意味がよくわからなくても今それを保障することが大切であると考えてやってきた。

また、その時には納得のいく説明が得られない、ということであっても、人間の行動を理解しようとする時にはあり得ることであるし、周囲の者から見て子どもがそのわけを表現していないという見方は、その見ている人がわかっていないということもあり得る。私たちの目から見て、自分たちの考えの範囲外の行動であつたという理由で、その行動をやめさせてもいいものだろうか。また、一般社会の規範やいわゆる育児の知識からみて、その子どもの行動が“適当でない”という見方をしてやめさせてもいいものだろうか。大人の側から見て納得のいく説明をすることができないものには、その子どもにとっての理由がないとは言えない。表現とはことばだけでなく、その子どもの表情や体全体などの動きをも含めたものが表現である。このように考えると“オッパイを吸う”ことを求め続けているということは、明らかな“表現”であると考えられよう。

子どもと接する人には、その子どもの心の内で表現する“ことば”<sup>(17)(18)</sup>をくみとりたいという気持、くみとろうとする気持、くみとってみること(気持に近づいてみる、あとからついていく気持)——まわりのものが子どもをみてこうだ、と決め

つけない見方——で接することであろう。

しんごちゃんの場合には、初期からオッパイを吸うことの意味はよくわからなかった。子どもの要求にはわけがある、という見方でその行為を保障したことがよかったと考えている。

## 2. オッパイを吸うということについて

オッパイを吸うという行動が子どもの不安緊張を静めるにはたいへん効果があるという。指しゃぶり行動と違い、オッパイは自分の<sup>(7)</sup>ではない、他者の、母親のそれであった。しんごちゃんにとって自分の不安緊張をしずめる“もの”が“母親のオッパイ”であったことは、母子の間柄を発展させるのに役だった。

指しゃぶり行動とほぼ同義と思われる爪かみ行動がほどなくなかったのは、母親にくっついて“オッパイを吸う”ということで保障されたことと、その行為をすることで自分の気持をしずめる効果があったからなのであろう。また、その行為を続ける為に母親を求めたことは母親のそばに近づいていく、くっついていく、くっつくということで、結果的にいつでも母親との距離を保っていた（母親との距離がゼロ）ということであった。

このように考えると、しんごちゃんにとっては“オッパイを吸う”という行為は、母親をひきつける強い“信号行動”であったと言えよう。

## 3. 距離を保つということ——母親の役割——

Harlow<sup>(1)(2)(3)(4)(14)</sup>のサルの実験で示されたように、子ザルにとって母親がいつもそこにおり、しがみつかせてくれることは子どもの成長にとって大事な条件であった。しんごちゃんは“オッパイをもって”（人）があることを知っていたと思われる。いわばあのサルのようにその場に行き、しゃぶっていた。Harlowの実験での代理の母親は、何をされても何も言わない。それと同じつきあいを人間の母親に期待するのはたいへんであった。しかし母親はそれをやってくれた。子どもにとって、“いい”のであればそれを保障することが母親の役割であると考えたからである。

しんごちゃんの成長に伴って、しんごちゃんが家から外へというように場の移動をするようになった。その時期にも母親は、しんごちゃんから母

親が見える位置で、しんごちゃんに何があった時でもすぐにしんごちゃんが戻れる位置にいてくれた。たとえば砂場で遊んでいる時には、1～2 m 離れたところのベンチに坐っている、というように。

母子間の距離という点からみても、その距離は子どもにとって母親がいつもみえる位置であり、母親にとってもいつも子どもが見える位置にいたことになる。そして、子どもに具合の悪いことが起こった場合には、最終的にはその母子間の距離がゼロとなっていたということである。

母子間の距離をゼロに近い状態にするということの意味を改めて教えられた。

## 4. 子どもをとりまくまわりの人たちの役割

母親との間柄が安定・充実するにつれてしんごちゃんは安定していった。母親との間で保障されて貯った、いわば“安心感の貯え”が外に向かうとすぐにスッとなくなるということを繰り返していた時期があった。

一番身近な人との間での対人関係の学習が外で役にたたなかったというのではなく、その時期とはまだその学習面では幼い未熟な状態であったと考えられよう。その場合でも、まわりの人たちが子どもの未熟さを認めた配慮があればすぐにスッとなくなるということはなかったかもしれない。

対人行動の発達には、子どもにとって一番身近な人で、子どもにとって安心してつきあえる人の順序性によってその人たちとのつきあいの頻度や密度が異なってくる。即ち、一番身近な人との間においてはやりとり行動も濃厚で、子どもからみてこの人ははたして大文夫人だろうかと思われる人ほど、その人とのやりとり行動の中味も薄いということである。

母親から家族、まわりの人へと対人行動が発達していくとき、子どもの側からみると見知らぬ、わけのわからない人ほどうまくつきあえない、ということになる。そしてまた、そういう人たちが<sup>(17)</sup>子どもたちに対して、いわばふみこむようなつきあい方をすることが多い。しんごちゃんにかぎらず子どもたちとつきあう時にはまわりの人たちが安心させるつきあい方<sup>(17)(20)</sup>や自分のかかわり方とそれを受けとめた子どもの反応をみて、自

分のかかわり方を修正していくつきあい方をしていくことができれば、その人たちとの間で人とのつきあい方を学び、より積極的にかかわっていくことができよう。しんごちゃんが外に出た時に、今まで貯えていたものがスッと減っていくような体験と、自家中毒を繰り返し起こしたことなどは、まわりの人たちのつきあい方とも関連があったのではないだろうか。

子どもとのつきあい方に関して、安心させるつのあい方の意味の大切さを今一度考え直すことなのではないだろうか。

#### 今後の課題

子どもたちの変化の過程には順序性というものがあるのを感じている。なかなか思わしい変化をしていかなかった子どもたちと、いわば無理なく育ってきた子どもたちのそれとは、違いがある。それぞれのメカニズムを明らかにしながら共通性も明らかにすることと、子どもたちの対人行動と言語発達などの発達過程を自分自身の変化過程とからませながらみていきたい。

#### おわりに

ひとりの子どもと“臨床”という場で出会うということで、共に何年もの間お互いの育ちをみつめ合うということにつながっていった。これからも、今もつづいているこのような出合いを大切にしていきたいと思っている。

臨床過程で子どもの見方、考える視点などの助言をしていただきました、お茶の水女子大学家政学部児童学科教授、田口恒夫先生、臨床に参加して、共に動いて下さった穂積千恵子さん、土屋より子さん、島上日出子さんに心から感謝申し上げます。まだ若い私を信頼し、私のことばを聞きとめ受けとめて下さったしんごちゃんと家族の方と、互いに信頼し合うということで生み出すもの（成長）について学ぶことができました。ありがとうございました。心から御礼申し上げます。

#### 参考文献

1. Harlow H. E(1959), Love in infant monkeys Sci. Americ., Sci. Americ. Frontiers of Psychological Research; 92-98, 太田次郎監訳 (1970), 子ザルの愛情, 日本経済新聞社
2. Harlow H. F, Mother love, CBS TV 16mm film "Conquest"
3. Harlow, H. F and Harlow, M. K. (1972), The language of love, communication and affect A comparative approach, pp 1-18, Academic Press.
4. H. F. ハーローほか (1975), 子ザルの異常な社会的行動, J. ヘルムート編, 岩本憲ほか訳, 障害乳幼児の発達研究, 21章, 黎明書房
5. Konner M. J (1972), Aspects of the development ethology of a foraging people in Blurton Jones N. (ed). Ethological Studies of Child Behavior. Cambridge University Press 11章
6. 佐々加代子 (1974) 臨床事例報告16例. 言語発達の臨床 二章, 光生館
7. 佐々加代子 (1975), いわゆる“指しゃぶり行動”に関する臨床的研究, お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士論文
8. 佐々加代子 (1976) 臨床事例報告21例, 言語発達の臨床第二集, 光生館
9. 佐々加代子 (1978), 言語発達遅滞児の臨床——臨床家の変化過程——, 白梅学園短期大学紀要第14号 pp79-97
10. 佐々加代子 (1978), ゆうちゃん母子との言語臨床実践活動, 昭和53年度日本言語障害児教育研究大会発表資料集, 日本言語障害児教育研究会 pp80-84
11. 佐々加代子 (1978), つきあい方にとまどいを感じる子どものかかわり方, 第16回日本特殊教育学会発表論文集, 日本特殊教育学会, pp366-367
12. 佐々加代子 (1979), 言語発達の臨床——臨床家の基本姿勢——, 白梅学園短期大学紀要第15号, pp37-50
13. 佐々加代子 (1979), 田口の臨床仮説を基盤とした言語臨床実践活動, 昭和54年度日本言語障



害児教育研究大会発表資料集, 日本言語障害児教育研究会, pp 65—70

14. 高山澄子, 佐々加代子 (1976), Harlow のサルの実験について——子ザルのパーソナリティーを育てるもの——言語障害研究85号, 日本言語障害児教育研究会, pp 1—10

15. 田口恒夫, 佐々加代子 (1974), 母親への手紙, 言語発達の臨床第三章, 光生館, pp 188—198

16. 田口恒夫編 (1976), 言語発達の臨床第二集, 光生館

17. Tinbergen E. A and Tinbergen N (1972)

Early childhood autism an ethological approach. Verlay Paul Parey. 田口恒夫編 (1976), 自閉症——文明社会への動物行動学的アプローチ——新書館

18. 津守真 (1974), 人間現象としての保育研究, 光生館

19. 津守真 (1979), 子ども学のはじまり, フレーベル館

20. 山田千星 (1977), 子どもとのかかわり方についての体験的一考察, お茶の水女子大学家政学部児童学科卒業論文

さっさ かよこ (児童学)